

## 飼料用米の取り組み

【中央農業改良普及センター地域普及グループ】

### ■ 課題名 売れる米産地の確立

### ■ ねらい

世界的な穀物価格の高騰による飼料価格の上昇を背景に、そして、2008年の地域水田農業活性化緊急対策により新たに生産調整面積を増やして取り組む飼料用米等の生産に対して助成が行われることになったことから、当普及センター管内でも飼料用米の作付けが始められることとなった。飼料用米では、多収によるコスト低減が課題となっていることから、低生産費かつ多収による栽培についてJA等と連携して取り組みを行った。

### ■ 活動対象

花巻市内飼料用米生産者・北上市内飼料用米生産者

### ■ 活動経過

(1) 花巻地域では、主食用米の取引強化を図ることと併せ、従来から取り組んでいる特別栽培米の契約先である生協からの要請を受けて、飼料用米の取り組みを開始した。20年度は、22.4haで135tの契約での取り組みとなった。生産された飼料用米は、地元の飼料会社で調製し、住田町内の養豚農家へ供給されることになっている。

飼料用米として、国で育成された専用品種があるものの、種子を確保できなかったことなどから、県育成品種で倒伏・病害に強く多収を期待できる「岩手68号」を主体に取り組みすることとし、JAいわて花巻とともに多収のための栽培管理指導を実施した。

また、JA、市農政課等の関係機関で組織する花巻農対本部において、さらなる多収・低コスト生産を目指して品種比較実証を行った。

(2) 北上地域では、取り組み農家の選定に当たって、緊急対策等の事業説明により希望者を募集し、講習会において低価格肥料や必要最低限の農薬使用による栽培法を提示するなどの結果、作付面積は24.8haであった。また、さらなる低コスト栽培に向けて、追肥時期の検討や直播栽培等の実証を行った。生産された飼料米は大手飼料会社で飼料米の調製を行い、畜産側（採卵鶏、養豚）へ供給された。

### ■ 活動成果

(1) 花巻では、平成20年度に135tの契約目標生産量に対し139tの生産量となり、反収も625kgの目標に対して600kgを達成することができた。取り組み組織によっては、平均反収670kgを確保したところもみられた。品種比較については、「岩手68号」に比べて収量・熟期等から「岩南29号（つぶゆたか）」が花巻地域での実用性の可能性が示された。**（平成21年度には契約数量が36.6ha、218tまで拡大している。）**

契約先の生協組合員が現地を訪れ、田植えや稲刈りの作業体験、飼料用米給与農場等を視察研修する、各種イベントも行われた。

(2) 北上では、「岩手68号」に加えて「ふくひびき」、「べこあおば」を試験栽培した。また、実証で行った追肥時期のポイントについては、穂揃期よりも減分期の効果が大きい傾向であった。鶏ふんを基肥に使用した直播栽培では、苗立ち期に硫酸の追肥を行うことで、化学肥料を基肥に使用した栽培法を上回る収量を確保できることが確認された。

- (3) 北上では、飼料用米の種子確保のために「べこあおば」を 20 a 分、種子生産用としての栽培管理も行った。
- (4) 花巻・北上ともに飼料用米の生産・流通にかかる協議会が設置され、今後の方針について検討が行われることになっている。

#### ■ 今後の課題

- (1) 県から飼料用米用途品種として「つぶゆたか（岩南 29 号）」「つぶみのり（岩手 85 号）」が出されたことから、これらの現地実用性について検討が必要である。
- (2) 地域によっては 600kg を超える反収を確保したが、飼料用米にはさらなる低コスト生産が望まれており、省力的に反収をさらに向上させることが必要である。
- (3) 主食用米との異品種混合について注意を喚起していく。
- (4) 飼料用米の生産・流通については、現状では交付金の活用がなければ赤字となるため、制度の継続が望まれる。



花巻 生協組合員の稲刈り体験



北上 登米市水田農業推進協議会での研修

#### ■ 協働した機関 J Aいわて花巻営農生活部米穀販売課・北上地域営農センター

#### ■ 中央農業改良普及センター地域普及グループ

チーム名：環境農業推進チーム

チームリーダー 島 輝夫 チーム員 多田浩美 小舘琢磨

執筆者：島 輝夫